
月見、時々花見

白兎 成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月見、時々花見

【Nコード】

N5958P

【作者名】

白兔 成

【あらすじ】

ちよっぴり不思議な、月の無い夜の二人組のお話

「春だねえ……」

蛇の目傘に筵を小脇に抱え、紺色の着物を着た女が歩いてきた。

「そうですね」

突然現れた私に驚きもせず、

「おや、アンタも花見かね？」

本当は違うけれど、

「そうなんです」

と答えた。

「奇遇だね、私もさ。こちらで見るつもりなのかい？」

「いえ、この先にある若い奴にしようかと……」

奥には私にとって大切な桜がある。

「へえ」

わざわざ小さな桜のもとに行くことに興味を持ったのかもしれない。

「貴女も一緒にいきませんか？」

胸の鼓動が速まるのを感じた。見てもらいたかった。

「なら、お言葉に甘えてご一緒させてもらおうかね」

浮き立つような感覚に花がほころんだ気がした。

彼女が隣に並んで歩き出す。

「ほう、まだ若いが風流な良い桜だ」

女の背丈より頭ひとつ大きいくらいの桜の木。

背丈こそないが、花がしっかりと付いていて寂しくは感じない。

「そう言って頂けると嬉しいです」

こんな奥まったところには誰も訪れてこない。

誰かが見つけてくれることがとても嬉しい。貴女ならなおさら。

いつも、優しく笑っていた。星明かりの中、桜の木々を撫で、根元に腰掛けて。

散歩が日課になったのも貴女がいなか探していたから。

「触れてもいいかい？」

また鼓動が早まるのを感じた。

「どうぞ」

彼女は目を閉じて、手を伸ばした。

優しく、まるで愛しいものに触れるかのような仕草。

幻想的で、温かな気持ちになる。

けれど、これは夢なんだ。伝わらないものなんだ。

「座って見てもいいかい？」

しばらくして、彼女がこちらに振り返り、筵を軽く持ち上げた。

「ええ」

筵を広げ、蛇の目傘を開く。動作の一つ一つが洗練されていて美しかった。

思わず見惚れていた私にかのじよはこえをかけた。

「アンタも座りんさいな」

彼女の隣には一人分の空間があった。

どうやら、隣にということらしい。

「お邪魔しますね」

腰をおろしたのを見計らっていたのかもしれない、彼女が口を開く。

「いつもここにいていいかい？」

「ええ、ほとんどここに」

散歩に出られる日は限られている上に長い時間離れるのもつらい。彼女の視線は桜からどんどん昇る。

「ここから何が見えるんだい？」

ぼうつと見つめる先はいつの間にか空だった。

「考えてもみなかった」

初めて空を見上げる。

散歩に出れない日は一目でも彼女を見たくって、見下ろしていた。「変わってるねえ…」いつだって空はアンタを見下ろしていたというのに「

空にはキラキラとした光が瞬いていた。

「明日には月が出るよ、夜に空を見上げてごらん？きっとアンタを見てるよ」

そう言って、桜の幹に触れた。

とても温かくて、何かが音を立てる。

「明日、一緒に空を見上げてくれますか？」

いつの間にかそう言っていた。

彼女が目を見開いた…ああやってしまった。

…もう、ここへ来てくれないかもしれない。

「そりゃあ、無理さね」

ほら、やっぱり。

花が散っていくようだ。

「アンタは月が出る日には空を見上げるのさ…月の出ない日には私がここに来るとしよう」

コロコロと笑う彼女に時が止まる。

「さあ、朝が来るよ。おうちにお帰り、桜木の精」

「！…何故、」

何故知っているのですか！？

「私はアンタの何千倍と生きてるんだよ」
頭が混乱する。

「アンタはこれから毎晩私を見上げるだろうね…でも、見上げさせるばかりじゃ申し訳ない。月の無い夜は私が逢いに来よう」

「私はいつでも見ているよ」

彼女は朝日を浴びて光の粒へと変わっていく。

・私はアンタが生まれた時からアンタを見下ろしてきた…これからもきつと、そうだろうよ・

（後書き）

ちよつと長かったかもしれません。

最後まで読んで下さったアナタ、ありがとうございます。

二人、とは人ではなく桜木の精と月の精。

不思議な夜を垣間見ていただけたなら、嬉しい限りです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5958p/>

月見、時々花見

2011年1月27日00時28分発行